

Outside and Inside of the Vittoriano: “Rome” concerning the National Monument to Vittorio Emanuele II

Teruaki J. I. Torigoe

Keywords: the Vittoriano; Vittorio Emanuele II; nationalism; Christianity; Mussolini; the Pantheon

ABSTRACT

“The Vittoriano,” the National Monument to Vittorio Emanuele II, invariably attracts the attention of the visitors to Rome by its enormity, its brilliant whiteness in an ochre-colored city, and the wide space surrounding it.

This monument is an expression of the misfortune of the modern Italian monarchy and a portent of the shortness of its reign. The Italian kings found themselves confronting, as a result of the unification process, the Catholic Church in a country where the majority of people were Catholics. They could not easily expect the support of their people. The outside of the Vittoriano unintentionally reveals this predicament. It is full of reminders of the prosperity, glory, and military power of Ancient Rome and also full of indications of modern nationalistic ideals. In contrast, we cannot find anything that suggests Christianity on the outside of this enormous structure. Even the equestrian statue of the king, the focus of this monument, is not supported by God but by an old Roman goddess “Dea Roma.”

The Vittoriano, inaugurated in 1911, was originally dedicated to the first king of Italy, Vittorio Emanuele II, who was regarded as “the liberator of the country and the founder of its unification.” A little later, in 1921, the tomb of an unknown soldier was added inside this monument, with its altar added on the outside. These additions were meant to commemorate all the soldiers who died for the country in the First World War. The tomb and the altar were not contradictory to the Vittoriano’s original purpose but rather intensified it, for both the glorification of the unification of the country and the commemoration of its dead soldiers were expressions of nationalism.

The use of the Vittoriano as an expression of nationalism continued

and was completed by Benito Mussolini. The Italian governments before him had already cleared congested residential areas in front and on each side of the monument, thus producing a wide space from which to admire this temple of nationalism. They had also newly redirected two main roads into the large square in front of the monument. Interestingly, the first act of the Italian dictator after his nomination as Prime Minister was to kneel and pray at the altar of the Vittoriano and, after that, to make a speech from its steps to his supporters who gathered in the square in front of it. Another interesting act of his regarding this monument of nationalism was moving his office to Palazzo Venezia in 1929 after his winning of the absolute majority of votes in a plebiscite. After this, he often delivered his speeches from the balcony of this palace, which looks up at the Vittoriano on its right. Thus the supporters who filled the square in front of him were made to be aware of his succession to and the furtherance of the unification achieved by Vittorio Emanuele II and his attempt at the rebirth of the Roman Empire. To make this rebirth visible, Mussolini constructed a road that connects the Vittoriano to the Colosseum. He constructed another road that connects the Vittoriano with the coast near Ostia, which was an important naval base for the Roman Empire in making the Mediterranean Sea “Mare Nostrum.”

The Vittoriano can be compared with the Pantheon. This round-shaped Roman building, originally dedicated to many gods, was adopted as a Christian church in the early 7th century, when the Catholic Church was gaining ascendancy over the polytheistic civilization of Rome. From the 13th to the later 19th centuries, the Pantheon as the Church of Santa Maria dei Martiri had bell towers with the Christian cross added on the roof of the portico, as a sign of the dominance of Christianity. Whilst the city of Rome has the Pantheon, which reflects the ascendancy of Christianity, it also has the Vittoriano, which reflects the ascendancy of nationalism over Christianity. The Vittoriano has effectively concealed inside a minor intrusion of Christianity, a small Christian chapel for the Unknown Soldier in its crypt.

The assault of nationalism on the Pantheon is a short but interesting story. In the 1880s, an inside chapel of the Pantheon, the one for the Holy Ghost, was replaced by the temple for Vittorio Emanuele II. Nationalism overpowered Christianity. Its overpowering is also noticeable in the removal in the same period of the cross-topped bell towers from above the façade of the Pantheon. Never again has there been a cross on the

portico of this building, a sign of the weakened strength of the Church.

However, the strength of the monarchical nationalism of Italy has also weakened, as was predicted on the outside of the Vittoriano. Umberto I, who succeeded Vittorio Emanuele II, also has a temple with his wife in one of the chapels of the Pantheon. However his temple is less ostentatious than his father's and looks somewhat like other traditional tombs in a Christian church. Neither his son, Vittorio Emanuele III, nor his grandson, Umberto II, has a temple in the Pantheon. They were both expelled from the country in 1946 when monarchy was abolished in Italy, having their tombs in Egypt and France respectively.

「ヴィットリアーノ」の外と内——ヴィットリオ・エマヌエー レ二世国立記念堂に見る〈ローマ〉

鳥越輝昭

はじめに

ローマに「ヴィットリアーノ」[Vittoriano]と通称される建造物がある。正式名称は「ヴィットリオ・エマヌエーレ二世国立記念堂」[Monumento Nazionale a Vittorio Emanuele II]だが、通称で呼ばれることが多い。以下の拙文でも、簡潔さを尊び、「ヴィットリアーノ」と呼ぶことにする。

「ヴィットリアーノ」は、ローマのさまざまな建造物のなかでも、古代のコロセウム、近世の聖ピエトロ大聖堂、近代のテルミニ鉄道駅などと並んで、とりわけ目立つ建造物である。「ヴィットリアーノ」が目立つ原因は三つある。第一に巨大さ、第二に色、第三に、それが建設されている環境である。

「ヴィットリアーノ」は、幅が一二五メートル、台座を含めた高さが八一メートルある。巨大なことで知られるコロセウムは、長辺が一八九メートル、高さが四八メートルである。「ヴィットリアーノ」は、幅はコロセウムの七割ほどだが、高さは二倍近くある。じつに巨大な建造物である。

「ヴィットリアーノ」は白色だが、色のこの白さが目立つのは、使用されている白大理石が、古来ローマではほとんど使われてこなかった石材だからである。ローマの建築物は、黄土色だったり灰色だったりすることが多い。そのなかで、この建造物の白さは、巨大さと相伴って、異様なほどに目立つ。

「ヴィットリアーノ」が目立つ第三の理由は、その前面に広大な「ヴェネツィア広場」が広がり、そこに四本の幹線道路が流れ込んでいるからである。「ヴィットリアーノ」は、前面にそれを引き立てる広い空間が用意されているばかりか、その前をしばしば通らざるをえない建造物なのである。

「ヴィットリアーノ」は、一八七八年のヴィットリオ・エマヌエーレ二世王 (Vittorio Emanuele II. イタリア王在位一八六一―一八七八年) の死去をきっかけに、はじめはローマ市により、そしてまもなくイタリア政府により建設が計画された (Brice 13)。ヴィットリオ・エマヌエーレ二世は、近代イタリア王国の初代の王である。政府は、「祖国の解放者であり、祖国統一の礎を築いたヴィットリオ・エマヌエーレ二世のための国家的記念建造物」 (Quoted in Brice 13) を作る法案を議会で可決させた。一八八五年、第二回目のコンペで記念建造物の設計が定まり、その後の工事を経て、一九一一年に落成式が催された。

「ヴィットリアーノ」は、政府の計画どおり、ローマ市の中心、「カンピドリオ (カピトル) の丘」に北向きに建てられ、ローマの目抜き通り、「コロソ大通り」を見通す位置にある。白大理石の堂々たる階段のうえの台座上には、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の騎馬像が据えられている。馬上の王は、コロソ大通りを一直線に駆け抜け、「ポポロ門」の先の北ヨーロッパに向かおうとしているかのように見える。

以下の拙文では、この「ヴィットリアーノ」というまことに興味深い建造物を取り上げ、(一) その外側と

内側の特徴を確認したうえで、(二) ムッソリーニによる「ヴィットリアーノ」の利用の仕方に注目し、(三) 古代ローマに由来する建築物「パンテオン」と比較してみる。そのようにしてみると、この建造物は、近代イタリア王国政府とローマカトリック教会との関係を浮かび上がらせ、ムッソリーニの精神と近代イタリア王国政府の政策との連続を示すことになるだろう。

ー ヴィットリアーノの外面

「ヴィットリアーノ」は、外面に明示的な数々の特徴を見せ、内部にも深長な特徴を潜めている建造物である。

まずは、「ヴィットリアーノ」の外面に見られる特徴を確認してゆくことにしよう。ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の騎馬像から。

この青銅製の騎馬像では、王は馬にまたがり、兜をかぶり、剣を鞍に差している。騎馬像が全体として表現しているのは、軍隊の指揮官としての王である。「ヴィットリアーノ」の旗竿に翻るイタリア国旗と合わせてみるなら、この像は、軍隊の力によって国家統一を成し遂げた王を称えるとともに、イタリア国家の目標が軍事強国にあることを示そうとしていることになるだろう。

王の騎馬像の背後には、それをゆるやかに包み込むように、横長の大きな建造物が設置されている。この建造物は左右がシンメトリカルで、重厚で幅広の土台のうえに載せられている。土台の両端は前後に長い立方体

の構造物になっており、さらにそのうえの奥まった位置に、もうひとつ、やや縦長の立方体の構造物を載せてある。この上段の立方体の前面はポルティコとして張り出し、ポルティコの上部に三角形のパディメントを見せている。このポルティコをふくめて、土台のうえの建物は、端から端まで多数の円柱を連ねた回廊になっていて、そのうえに分厚い石造りの屋根を渡してある。一言でいえば、これは古代ローマ帝国の神殿風建築だといえる。このローマ帝国神殿風の建築物を背景にしてみると、王の騎馬像は、王とそれが代表する近代イタリア国家が、古代ローマ帝国の繁栄・栄光・軍事力を背景にしていること、そしてそれを再興する存在であることを、雄弁に物語る。

さらに、王の騎馬像の載る台座も注目すべき構造物である。台座は二段構造で、騎馬像は、半円形に前方に突き出た第一の台座のうえに、楕円型の第二の台座を据え、そのうえに固定されている。注目すべきは、下段の半円形の台座である。この白大理石の台座の表面には、浮き彫り像が多数刻まれている。なかでもとりわけ目立つのが、正面中央、王の騎馬像の真下に位置する女性像とその姿勢である。女性像は古代の「ローマの女神 Dea Roma」であり、この女神像は、腕で王の騎馬像を支える姿勢を取っている。台座のこの女神像は、王の騎馬像と関係づけられることによって、王とそれが代表する近代イタリア国家が、古代の「ローマの女神」に支えられる存在であることを、明示的に語っている。

つぎに、王の騎馬像と同じ青銅製の塑像に目を向けよう。これらの像は、「ヴィットリアーノ」の全体が白色なので、目に立つ。騎馬像の上段の台座を載せる土台は左右に大きく広がっていて、その両端の立方体の構造物のうえには、二本ずつ円柱が立てられている。円柱のうえに据えられている青銅像は「勝利の女神 Vittoria」

「法」である。さらに、騎馬像の背後にある神殿風の建物の両端には、屋根のうえに、騎馬像と同じくらい大きな青銅像が据えられている。この二つの像は、どちらも、四頭立ての古代の戦車のうえに立つ勝利の女神を表現している。正面向かって左側の戦車像は「統一」を表し、右側の戦車像は「自由」を表している（Antellini 36-67）。これらふたつの像により、「祖国の解放者であり、祖国統一の礎を築いたヴィットリオ・エマヌエーレ二世のための国家的記念建造物」という政府の法案の主旨が視覚化されているわけである。ちなみに、王の騎馬像、勝利の女神像、戦車像は、今では塗装がかなり剥げ落ちているけれども、もとは全体を金色に塗られていたから（Antellini 36）、きらびやかに目立っていたはずである。

正面の階段を上り終えたところの左右には手摺りが延びている。手摺りの左端あたりにふたと、右端あたりにふたつ、土台に載せられた白大理石の群像がある。これらは正面左側から順に、「力」、「調和」、「犠牲」、「法」という寓意を表している（Antellini 21-27）。

王の騎馬像の台座、「ローマの女神」の左右には、群像が浮彫で描き出されている。正面左側の群像が表すのは「労働」、右側の群像が表すのは「愛国心」である（Antellini 31-32）。

王の騎馬像の背後にある古代ローマ神殿風の建物には、屋根の前面に、大理石製の立像が並んでいる。これらは、左から順に、トリノ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ナポリなどイタリアの十二の都市を表している（Antellini 38-42）。

なお、正面階段を上ったところの左右には、イタリア国旗が翻っているが、国旗を掲げてある柱の先端には、小さな青銅製の「勝利の女神」が取り付けられている。

さて、これまで、「ヴィットリアーノ」に取り付けられたり彫刻されたりしている多数の像とそれらが表す意味を確認してきた。その結果としてわかるのは、この記念建造物には、表裏一体をなす三つの顕著な特徴があるということである。

ひとつの特徴は、「ヴィットリアーノ」の外面に、キリスト教にかかわるものがまったく存在しないことである。そこには一本の十字架も、一体のキリスト像も聖母像も存在しない。ペトロやパウロなどの聖人像も、やはり一体も存在しない。

それと対照的に、「ヴィットリアーノ」の外面にあるのは、ひとつは、古代ローマとその帝国を表すものであり、もうひとつは、近代の理念を表すものである。「ローマの女神」、古代ローマ風の建築、古代の戦車は、古代ローマやその帝国を代表するものである。もう一方で、「労働」、「愛国心」、「統一」、「自由」は近代の代表的な理念を表している。

「ヴィットリアーノ」の外面に明示されている精神を、一言にまとめれば、反キリスト教的もしくは非キリスト教的で、古代ローマ的かつ近代的、だといえる。

しかし、この精神とその表現は、考えてみれば、きわめて異常なことであることがわかる。なぜなら、都市ローマには隣接してローマカトリックの中心であるヴァティカンがあり、「ヴィットリアーノ」が作られた頃、イタリア国民の圧倒的多数はローマカトリック教徒だったからである。なにしろ、一九〇一年の国勢調査で「無宗教」と答えたのは全人口のわずか〇・一パーセントであり、一九一一年の国勢調査でもわずか二・五パーセントにすぎず（Clark 2014: 180）、（調査では宗教・宗派は不明ながら）「信者」の圧倒的多数は、それま

での歴史から見て、ローマカトリックだったろうと推測されるからである。

この状態をふまえるなら、「ヴィットリアーノ」は、近代イタリア王国の不幸を象徴する施設であり、その遠からぬ消滅をも予告する施設だったともいえるだろう。

「ヴィットリアーノ」が近代イタリア王国の不幸を象徴するといったのは、ほかでもない。イタリアの国家統一は、錯綜する国際関係のなかで、サルデーニャ王国が、その軍事力を行使し、ガリバルディなどの義勇軍の力も利用しながら、成し遂げたものである。国家統一にあたって、最後の障害となったのは、ほかならぬローマ教皇庁だった。教皇庁は、ローマを首都としてイタリア中部の教皇国家を統治していたからである。ヴィットリオ・エマヌエーレ二世を王としたイタリア王国は、一八七〇年、軍隊によってローマを攻撃、開城させて、教皇をヴァチカン宮殿へ追いやり、ローマを首都と定めた。以後、イタリア王国政府とローマ教皇庁は敵対関係になった。イタリア政府とローマ教皇庁がようやく和解するのは、六〇年後、一九二九年のことである。

ヴィットリオ・エマヌエーレ二世自身は、政府が導入しようとする反キリスト教会的政策（民事的婚姻や修道院解散など）に抵抗をした人物である（Clark 2013: 68）。そういう人物が、国家統一事業の過程の結果として、国民に向けて、たとえば英国王のように「キリスト教王」と自己規定したり、アメリカ大統領のように「キリスト教大統領」と自己規定したりできなかったことは、本人にとっても、後継者にとっても、純粋に政治的に見て不幸なことだった。キリスト教国のイギリス王（女王）は戴冠にあたって、伝統的に「法と教会」を守ることを誓うのであるし、国民は王（女王）のために「神よ、王（女王）を守りたまえ God save the

King (Queen) 」、と神の加護を願う。キリスト教国アメリカ合衆国の大統領は就任に当たって、聖書に手をおいて宣誓するのである。しかし、近代イタリア王国の王たちは、キリスト教（ローマカトリック）国の王でありながら、自己を「キリスト教主」としてアピールすることができなかった。これらの王たちは、建国当初から大半の国民の心理的支持を得にくい立場にあった。その点で、この王権は出発点から弱点を抱えおり、長続きすることの難しい王権だったのである。王制のイタリアは、はたして、一八六一年から一九四六年までのわずか八十五年間しか続かなかった。

「ヴィットリアーノ」には、いみじくも、キリスト教の「神」の支持―現実にはローマカトリック教徒の支持―の代わりに、王を支えるのが古代の「ローマの女神」であるかのように像が刻まれている。しかし、「ローマの女神」はすでに滅んだ虚構の神にすぎなかったのである。

二「ヴィットリアーノ」の内部

前節では、「ヴィットリアーノ」の外面に注目したのだが、この記念堂は、内部にもたいへん興味深いものを潜めている。それは、王の騎馬像の台座に関わっている。騎馬像の下段の「ローマの女王」が刻まれている台座は、じつは「祖国の祭壇 Altare della patria」と呼ばれているものである。この祭壇は、「ヴィットリアーノ」内部の地下墓所に葬られている遺体と関連している。遺体はヴィットリオ・エマヌエーレ二世王のものではなく、無名戦士の遺体である。「祖国の祭壇」に刻まれている「ローマの女神」、「労働」の群像、「愛国

心」の群像も、直接的には無名戦士の墓に関連する像である。

「祖国の祭壇」と無名戦士の墓は、一九二一年に設置された。これは、イタリア政府が、第一次世界大戦で戦ったイタリア軍兵士を称えるために作ったものである。墓に埋葬する戦没者の選択に当たっては、山間部のロヴェレートから海岸のマリーナに至る十一の地方出身の、身元のわからぬ戦死者十一名の遺体が集められ、そのなかの一体が選ばれて「ヴィットリアーノ」の地下墓所に葬られた (Antelini 28)。このひとつの遺体で、全戦死者を代表させることにしたのである。葬儀は国葬として営まれ、王妃も出席した (ibid.)。

つまり、「ヴィットリアーノ」という建造物は、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世という王とその業績を記念する施設であるとともに、無名戦士のための国立墓地でもある。ひとつで、二重の機能を果たしているのである。なお、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世王の墓は、この施設ではなく、「パンテオン」すなわち「聖マリア・デイ・マルテイーリ教会」のなかにある。王のこの墓については、のちにふれる。

この無名戦士の地下墓地は、じつはキリスト教（ローマカトリック）との関わりを伴っている。地下墓地はキリスト教の礼拝所になっており、祭壇にはキリストの十字架像も置かれているのである。しかし、重要なのは、この礼拝所は「ヴィットリアーノ」の内部に潜められていることである。「ヴィットリアーノ」という建造物では、無名戦士の墓についても、表に見せているのは、あくまで「祖国の祭壇」、すなわち、「ローマの女神」、「労働」の群像、「愛国心」の群像である。

「祖国の祭壇」と無名戦士の墓は、「ヴィットリアーノ」にあとから付加された要素である。しかし、それは、「ヴィットリアーノ」の当初の目的と矛盾するものではない。むしろ、「祖国の祭壇」と無名戦士の墓は、「ヴ

「ヴィットリアーノ」の当初の目的と一貫し、それを完成させたともいえる。「ヴィットリアーノ」建設の最初の重要な目的は、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世王のイタリア統一事業を称えることだった。言い換えれば、それは近代ナショナリズムの発現と達成を称えるものだったのである。もう一方の「祖国の祭壇」を見直してみよう。すると、そこには「愛国心」の群像があるが、それは近代ナショナリズムの明瞭な発現である。無名戦士の墓は、国家のために戦って死んだ兵士を称えるための施設である。それもまた、近代ナショナリズムの明瞭な発現である。こうして、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世記念堂としての「ヴィットリアーノ」と「祖国の祭壇」・無名戦士の墓としての「ヴィットリアーノ」とは、どちらもナショナリズムの表現という点で、密接に結びついているのである。

議論を先に進める前に、「ヴィットリアーノ」の全体について一旦まとめておこう。この記念建造物の外面は、直接的にはヴィットリオ・エマヌエーレの国家統一事業を称えるものである。建造物の内側は、直接的には無名戦士の遺体を埋葬した墓である。しかし、「ヴィットリアーノ」の外面と内面は、「ナショナリズム」という近代の理念もしくは疑似宗教によって、精神的に連続した統一体をなしている。この精神的統一体はまた、古代ローマ帝国とその復活の幻影を共有している。その現れが、「ローマの女神」であり、古代ローマ帝国神殿風の建物である。そして、「ヴィットリアーノ」は全体として、ローマカトリック教との関わりを、外面にまったく見せていない。

三 「ヴィットリアーノ」とムッソリーニ政府

ところで、これまでに「ヴィットリアーノ」について浮かび上がってきた「愛国心」、「古代ローマ帝国復活の幻影」、「労働」、「統一」というキーワードをまとめて見たとき、イタリア史のなかで思い出さざるをえない人物がいる。それが、ベニート・ムッソリーニ (Benito Mussolini, 一八八三—一九四五年) である。「ヴィットリアーノ」に無名戦士の墓が設置された一九二一年は、奇しくも、「全国ファシスト党 (Partito Nazionale Fascista)」が結成された年である。翌二二年には、ムッソリーニを首班とする連立内閣が成立し、二四年には、このファシズム連合は総選挙で大勝する。無名戦士の墓の設置は、ファシズムの伸張と同時期に同種の精神的雰囲気の中で行われた事業だということがわかる。そればかりではない。ムッソリーニは、意識的かつ直接的に「ヴィットリアーノ」という建造物を利用した人物であることが知られている。

ムッソリーニによる「ヴィットリアーノ」の利用の仕方を、便宜上、ムッソリーニが「ヴィットリアーノ」に対して直接取った行動と、「ヴィットリアーノ」に関連しておこなった建設工事とに分けて見ることにしよう。

まず、ムッソリーニが「ヴィットリアーノ」に対して直接取った行動である。一九二二年に、ファシスト党員たちはローマへ行進し、この示威行動によって、ムッソリーニは王から首相の指名を受けることになる。ムッソリーニ自身は、首相指名を告げられたあとで、ミラーノから鉄道でローマへやって来る。それは、ファシ

スト党員たちのローマ到着の二日後のことだった。注目すべきことに、ローマに着くと、ムッソリーニは「ヴィットリアーノ」へ行く。そして、「祖国の祭壇」の前にひざまずいて祈ったあとで、「ヴィットリアーノ」の階段から、その前のヴェネツィア広場に集合していた支持者たちに演説した (Atkinson & Cosgrove 40)。

なお、ムッソリーニがこの際に取った行動を、無名戦士の墓と「祖国の祭壇」にだけ関係させる見解もある (Atkinson & Cosgrove: ibid.)。しかし私見では、ムッソリーニのこの行動は、無名戦士の墓と「祖国への祭壇」を含む「ヴィットリアーノ」全体と関係させて捉えるほうが良いと思う。なぜなら、のちにふれるように、ムッソリーニは、別のいくつかの機会に、もう少し広い意味で「ヴィットリアーノ」全体を利用する行動を取っているからである。

一九二九年、ムッソリーニ政府はその政策について国民投票を実施した。八百五十万人以上のイタリア国民が賛成投票をし、反対票はわずかに十三万五千票だった (Bosworth 197)。興味深いのは、そのあとのムッソリーニの行動である。ムッソリーニは、その半年後に、執務所をそれまでのキージ宮殿から、「ヴェネツィア宮殿 Palazzo Venezia」に移すのである。キージ宮殿は、ヴェネツィア広場とポポロ門を結ぶコルス大通りの中程にある。それに対して、ヴェネツィア宮殿は、ずっと南寄りのヴェネツィア広場の脇にあり、ヴィットリアーノの間に位置している。

ヴェネツィア宮殿のファサードは、西側からヴェネツィア広場を見下ろしており、南側から広場を見下ろす「ヴィットリアーノ」と直角の位置にある。ヴェネツィア宮殿の広場側の窓からは、右側に「ヴィットリアーノ」が見える。ムッソリーニは、ヴェネツィア宮殿の正面テラスから、ヴェネツィア広場に集まった群衆に演

説することが多かった。その場合、群衆から見ると、正面上方にムッソリーニがおり、左手には「ヴィットリアーノ」が聳えていた。ムッソリーニは、あきらかに「ヴィットリアーノ」の存在を意識し、群衆に「ヴィットリアーノ」を意識させる位置に執務所を置いたのである。

では、ムッソリーニは、「ヴィットリアーノ」の何を群衆に意識させようとしたのか。それは、「ヴィットリアーノ」の表現している「愛国心」・「古代ローマ帝国復活の幻影」・「労働」・「統一」という理念であり、自分はその継承者だということだったはずである。

「愛国心」・「労働」・「統一」については、ムッソリーニ政府が大学教師たちに強制した宣誓のなかに、つぎの箇所があることに象徴的に現れているだろう。

……国家とファシスト体制に献身的であるような、勤勉で高潔な市民を育成する目的をもって、教師職を遂行し学問的義務を果たすことを、わたくしは誓います (Quoted in Clark 2014: 295)。(傍点は筆者)

「古代ローマ帝国復活の幻影」についても、ムッソリーニもしくはムッソリーニ政府のおこなった施策をいくつか挙げることができる。たとえば、「古代ローマ式」敬礼の採用、「ドゥーチエ」、「ファッショ」、「レジョーネ」、「コオルテ」などの用語の採用、そして「マレー・ノストルム」を復活させようとしたことである。

「古代ローマ式」敬礼は、右腕と右手をまっすぐ伸ばして前方に掲げる敬礼で、古代ローマのアウグストゥス像などに見られるものである。ファシスト政府は、敬礼をこの仕方に変更した。

ムッソリーニの称号「ドゥーチェ Duce」は古代ローマの「ドゥクス dux」（指揮官）に由来し、ファシスト党がシンボルとした「ファッショ fascio」は、古代ローマの執政官の「*fascis* 権杖」に由来していた。古代ローマでは、棒を束ねた柄に斧を取り付けたこの「権杖」が、執政官たちの前に捧げ持たれたのである。ファシスト義勇軍の編成単位の名称に使用された「レジョーネ *legione*」は、古代ローマ軍の「軍団 *legio*」を表すイタリア語であり、「コオルテ *coorte*」黒シャツ隊は、やはり古代ローマ軍の「歩兵隊 *cohors*」を表すイタリア語である。

またムッソリーニ政府は、古代ローマが地中海を「われらの内海（マレー・ノストルム）」にしていたように、地中海を取り囲む帝国を形成しようと試みた。イタリアはすでに一九一〇年代から北アフリカのリビアを植民地にしていたが、ムッソリーニ政府は、さらに、一九二〇年代にはユーゴスラヴィアからフューメを割譲させ、アルバニアを勢力下に置き、ギリシアからドデカネス諸島を入手した。さらに一九三五年には北アフリカのアビシニアを侵略してゆく。

ムッソリーニがヴェネツィア宮殿を執務所にしたこともまた、「マレー・ノストルム」といくぶんか関係しているはずである。この宮殿は、ヴェネツィア共和国が健在だったころは、ローマ教皇庁へのヴェネツィア大使が公邸とした建物だった。そして、ヴェネツィア共和国は、中世から近世にかけて、東地中海を「マレー・ノストルム」にしていた海軍帝国だったのである。

ところで、「ヴェネツィア宮殿」と「ヴィットリアーノ」の前に広がる「ヴェネツィア広場」は、今でこそ

広々とした空間で、そこに四本の幹線道路が集中している。だが、このあたりは、「ヴィットリアーノ」が建設される以前は、大小様々な家屋が密集し、小さな広場しか存在しない場所だった。この場所が現在のかたちになったのは、「ヴィットリアーノ」の建設に関わったイタリア政府と、その後のムッソリーニ政府の施策の結果である。この点でも、ムッソリーニ政府はそれ以前の政府の政策を継承・発展させており、連続性が見られる。

「ヴィットリアーノ」の完成（一九一一年）までに、今のヴェネツィア広場あたりには大きな変化が加えられた。主な変化は三つある。

(一) 「ヴィットリアーノ」の建設予定場所の目の前には、「ヴェネツィア小宮殿（バラツエット・ヴェネツィア）」という建物があった。これが解体されて、九〇メートルほど西に移動された。この移動により、「ヴィットリアーノ」の前面からヴェネツィア宮殿前に広がる大きな空間が作り出された。

(二) ヴェネツィア宮殿の向かいにあった建物（トルロニア宮殿）が破壊された。そのあとには、ゼネラリ保険会社の建物が建てられた。これはヴェネツィア宮殿とよく似た建物で、広場を東西に挟んでシンメトリカルな形態を作り出している。

(三) 古代ローマ時代のふたつの遺跡を除いて、「ヴィットリアーノ」の前面と左右にあった各種の建築物はすべて破壊された（Atkinson & Cosgrove 36）。これによって「ヴィットリアーノ」の前面と左右には、邪魔物は何もない広々とした空間が広がった。

ムッソリーニ政府によって「ヴィットリアーノ」周辺に与えられた変化は主にふたつある。

- (一)「ヴィットリアーノ」の東脇からコロセウムに至る直線道路が建設された（一九二四—一九三二年）。「ヴィア・デッリンペーロ通り（帝国通り）」と名付けられたこの道路は、古代ローマの遺跡「フォロ・ローマノ」の脇を通り、「ヴィットリアーノ」を古代ローマ帝国の大建築コロセウムと結びつけるものだった。この道路は、名称と視覚の両面から、「ヴィットリアーノ」と古代ローマ帝国との結びつきを強化したものである。なお、この道路を作るために、ムッソリーニ政府は、五五〇〇の家と三つの教会とを破壊した（Kostof 60）。

- (二)「ヴィットリアーノ」の西脇からオスティア海岸に至る道路が建設された（一九二八年開通）。この道路は「ヴィア・デル・マーレ（海の道）」と名付けられた。オスティア海岸は、古代ローマ時代に海港があり、古代ローマが、地中海の制海権を行使する拠点だった。この「ヴィア・デル・マーレ」道路建設によって、「ヴィットリアーノ」という存在は、「われらの内海（マーレ・ノストルム）」を支配した栄光の古代ローマと結びつけられたのである。

このように、「ヴィットリアーノ」に関わるムッソリーニ以前のイタリア政府とムッソリーニ政府の施策を整理してみると、そこには明らかな一貫性があり、ムッソリーニ政府の施策は、それ以前のイタリア政府の施策を強化していることがわかる。施策の根本理念は、「ヴィットリアーノ」をできるだけ目立たせ、それを栄光の古代ローマと結びつけることである。この施策は、もちろん、「祖国の祭壇」と無名戦士の墓に関わるナ

シヨナリズムと表裏一体をなしているのである。

四 ヴィットリアーノとパンテオン

われわれは、ここまで「ヴィットリアーノ」に関わるいくつかの特徴を確認してきたのだが、それらの特徴は、ローマにある別の有名建築物「パンテオン」に関わる特徴と比べると一層明瞭になるだろう。その比較はまた、「ヴィットリアーノ」の背後にある近代イタリアの精神的な特徴にも光を当てることになるだろう。

現在われわれが見る「パンテオン」という建築の重要部分は、紀元二世紀にハドリアヌス帝によって建設されたものである。「パンテオン」が、語源的には「あらゆる神々」を意味することはよく知られている。ただし、この建物の用途は、完全には解明されていないようである。

「パンテオン」については、なによりも重要なことがふたつある。

(一)「パンテオン」は、本来はキリスト教以外の神々に関わる施設だったこと

(二) 七世紀初頭（六〇九年頃）に、ローマ教皇が、コンスタンティノーブルのローマ皇帝から「パンテオン」をキリスト教の教会として使用する許可を与えられたこと（MacDonald 14）

「パンテオン」は多神教の施設をキリスト教会とした最初の建物である（Hughes 172）。ローマ教皇は、この建物から、「異教の汚れを取り除いたのちに」（Quoted in MacDonald 14）、それを「聖母マリアと諸殉教者に捧げる教会」とした。その時から現在まで、この建物はラテン語の正式名称を「サンクタ・マリア・アド・

マルティールス教会」、イタリア語で「聖マリア・デイ・マルティール教会」と呼ばれ、一般には「サンタ・マリア・デッラ・ロトンダ教会」と通称されるキリスト教（カトリック）の教会として使用されてきた。

この建物がキリスト教の教会であることを、外面に明示する試みは、いくつかなされている。一三世紀末期からファサードのうえには鐘楼が載せられた。鐘楼は、最初は中央にひとつ、一七世紀初期からは、それに代えて左右にふたつ載せられた。当時描かれた絵を見ると、どちらのタイプの鐘楼にも十字架が付けられている。それによって、「パンテオン」はキリスト教会であることを明示されたのである。

「パンテオン」の前面は広場（ピアッツァ・デッラ・ロトンダ）になっているが、その中央には、一八世紀初頭からオベリスクが建てられている。注目したいのは、その先端に十字架が取り付けられていることである。これも、「パンテオン」がキリスト教会であることを明示しようとするものである。

「パンテオン」は、内部についても、キリスト教会であることを明示している。入口から入った突き当たり、正面奥にあるのがこの教会の主祭壇で、そこには十字架像と聖母子を描いたイコンとがあり、その上部にも、多数の十字架を描いたモザイク画がある。

こうして概略を確認した「パンテオン」を、「ヴィットリアーノ」の特徴と比べてみよう。ふたつの施設のあいだには、重要な相違がいくつか見つかる。

第一は、ふたつの建物の目的に関わる。「パンテオン」は、初めは多神教の神殿として作られたが、途中からキリスト教の教会に転用された。それとは対照的に、「ヴィットリアーノ」は、キリスト教とは異なる理念もしくは疑似宗教であるナシヨナリズムを称える施設として作られ、以後目的を変更されていない。

第二、「パンテオン」は、本来は多神教の神殿でありながら、その外部にはキリスト教会である印——十字架や鐘楼——を付加されていた。内部についても、キリスト教会であることを明示するもの（キリスト教の祭壇、聖母子のイコン、十字架のモザイク画）が付加された。それとは対照的に、「ヴィットリアーノ」の外面は、古代ローマの神々（「ローマの女神」や「勝利の女神」）やナシヨナリズムの理念（「軍事力」・「愛国心」・「労働」・「統一」）に捧げられている。この施設は、前述のとおり、内部にはキリスト教の礼拝所を潜めているが、それを外面には一切見せていない。

第三は、利用のされ方に関わる。「パンテオン」は、何世紀にもわたってキリスト教会として利用され、また観光名所でもある。そして建物自体は、世界各地のさまざまな丸屋根建築のモデルとされてきた。それとは対照的に、「ヴィットリアーノ」は、もっぱらイタリアのナシヨナリズム発揚のための施設として使われてきた。

以上の比較をまとめてみるなら、「パンテオン」と「ヴィットリアーノ」は、ヨーロッパの歴史になかに生じたふたつの精神的潮流を代表する建物だといえるだろう。

「パンテオン」は、建設時にはまったく予想されなかったことだが、ヨーロッパのなかで古代の文明と交代し勢力を増していったキリスト教のなかに取り込まれ、キリスト教的な要素を付加されて現代まで生き延びてきた。そもそも、キリスト教会として使用されなかったなら、この建物も、他の多くの古代の建物と同様に破壊された可能性が高いのである。多神教の施設「パンテオン」がキリスト教の教会に用途を変更された七世紀初めには、ローマ教皇庁はすでにヨーロッパ最大の領主であり、教皇グレゴリウス一世時代（五九〇—六〇四

年)に、その広大な領地から効果的に収入を得る統治システムを構築していた(Norwich 41-5)。多神教の施設「パンテオン」は、この上り坂のキリスト教勢力によって、施設のひとつとして吸収されたのである。

「パンテオン」への鐘楼と十字架の付加についても、考えておこう。一三世紀におこなわれた付加については、大きな歴史の流れのなかで見れば、キリスト教の勢力が強力だった時期の出来事だということしか言いえない。しかし、一七世紀初期の鐘楼と十字架の付加については、ローマ教皇シクストゥス五世(Sixtus V. 在位一五八五～一五九〇年)の方針を継承しているものといえる。この教皇は、古代ローマのトラヤヌスの円柱の先端に聖ペトロの像を設置し、マルクス・アウレリウスの円柱の先端に聖パウロの像を設置した(Hughes 293)。キリスト教(ローマカトリック)の勢力を視覚的に誇示する政策を採ったのである。

このように、「パンテオン」は、ヨーロッパ史におけるキリスト教が担った役割を視覚的に見せてくれる建物である。

それとは対照的に、「ヴィットリアーノ」は、ナシヨナリズムという近代の理念―あるいはキリスト教に取って代わろうとした疑似宗教―の神殿として構想され、その方針を貫いてきた。こちらは、ヨーロッパ史のなかで近代ナシヨナリズムの果たしてきた役割を視覚的に見せてくれる建物である。都市ローマには、興味深いことに、ヨーロッパ史のなかでキリスト教が果たした役割を象徴する「パンテオン」と、近代ナシヨナリズムが果たした役割を象徴する「ヴィットリアーノ」が、眼前に併存しているのである。

われわれは、一九世紀後半以後の「パンテオン」と、完成後の「ヴィットリアーノ」とに生じた変化にも注目しておこう。なぜなら、その変化は、キリスト教とナシヨナリズムとのせめぎ合いの表れとして興味深いか

らである。

このせめぎ合いが見られるのは、「ヴィットリアーノ」の場合には、すでにふれた、無名戦士の地下墓地に設置されたキリスト教（ローマカトリック）の祭壇である。これは、イタリア社会におけるキリスト教の潜在力が、「ヴィットリアーノ」というナシヨナリズムの殿堂に侵入した事例である。二〇世紀初頭のイタリアのような圧倒的なカトリック社会では、無名戦士の慰霊はカトリックのキリスト教によらざるをえなかったのである。しかし、すでに見たとおり、「ヴィットリアーノ」は、この侵入を、表面的には、「ローマの女神」と「愛国心」・「労働」・「統一」の彫像によって、隠し通した。

一方、キリスト教会としての「パンテオン」にも、ナシヨナリズム側からの侵入が見られる。もともと顕著なのは、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の祭壇である（一八八八年完成）。ヨーロッパの教会では、古くから有力者や著名人を教会の内部に葬ることが、広くおこなわれてきた。キリスト教会としての「パンテオン」にも、画家のラファエッロや作曲家のコレッリなどの墓がある。しかし、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の墓所は、性格が大きく異なっている。この墓は礼拝所（チャペル）のなかに設置されており、礼拝所のなかに十字架や聖画がない。この墓所は死後の王のために神の加護を祈る施設ではなく、死んだ王そのものを礼拝させる施設である。しかも注目すべきことに、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の祭壇に変更される以前にも、その場所には礼拝所があり、その祭壇には「聖霊」が祀ってあった。すなわち、これは、イタリア王の祭壇——ナシヨナリズムの祭壇——が、三位一体の位格のひとつの「聖霊」を追い出して、入れ替わったということである。この変更には、一九世紀後期（一八八〇年代）のイタリア政府と、カトリック教会との力関係が窺える。

なお、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の礼拝所には両脇に小さな十字架が付けられているが、この場所でのナシヨナリズムとキリスト教との優劣は明白で、ナシヨナリズムが圧倒的に優勢である。

しかし、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世のあとを継いだウンベルト一世 (Umberto I. 在位一八七八～一九〇〇年) の場合には、様子がかなり異なる。たしかに、この王とその王妃の墓も「パンテオン」のなかにある。ふたりの墓の背後には聖画や聖人像などはないから、これも父王の場合と同様に、キリスト教の礼拝所ではなく、王と王妃を礼拝させる施設である。しかし、父王の礼拝施設と比べると墓の規模がはるかに小規模であるし、墓は、父王の墓の場合とは異なり、礼拝所のなかには設置されず、ふつうの墓の場合のように、礼拝所の前に据えられている。ウンベルト一世王と王妃の墓所の場合には、視覚的に見て、ナシヨナリズムとキリスト教の力のせめぎ合いは、前者がやや勝る程度に感じられる。

そして、ウンベルト一世のあとを継いだヴィットリオ・エマヌエーレ三世 (Vittorio Emanuele III. 在位一九〇〇～一九四六年) とウンベルト二世 (Umberto II. 在位一九四六年五月～六月) の墓は、どちらも「パンテオン」ではなく、イタリア国外にある。これらふたりの王たちは、一九四六年に王制が廃止された際に、国外追放の身となり、ヴィットリオ・エマヌエーレ三世はエジプトで死に、墓もエジプトのアレクサンドリアにある。ウンベルト二世は、スイスのジュネーヴで死に、墓はフランスのサヴォアにある (この地は、サヴォイア王家の出身地ではあるけれども)。これらの王については、墓を「パンテオン」に置くことも、いわんや礼拝所を設置することもできなかったのである。イタリア・ナシヨナリズムの一大勢力としてのサヴォイア王家は、この時期になると、キリスト教の勢力を乗り越えるだけの力を失っていたといえる。

最後に、一九世紀後期になって、「パンテオン」の外面に生じた重要な変化にもふれておくべきだろう。「パンテオン」のファサードの屋根のうえに設置されていたふたつの鐘楼と十字架は、一八八〇年代に撤去された。これによって、「パンテオン」の外面に、キリスト教会であることを明示する印は存在しなくなった。その後、「パンテオン」がキリスト教会であることを示しているのは、その前のロトンダ広場に立てられているオベリスクの先端の十字架のみとなった。しかもその表示は間接的なものである。鐘楼と十字架の撤去は、表面的には、「パンテオン」を古代の形態に復帰させたことになる。しかし、われわれは、それがヴィットリオ・エマヌエーレ二世の礼拝所の設置と同時期におこなわれた点に注目する必要があるだろう。「パンテオン」からの鐘楼と十字架の撤去は、栄光の古代ローマの復興と結びついたナシヨナリズムが勝利した事例のひとつである。そのうち、「パンテオン」の外面にキリスト教会の印が復活されることはなかった。

「パンテオン」の内部と外部をめぐるキリスト教とナシヨナリズムのせめぎ合いをまとめてみよう。一八八〇年代には、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の礼拝所の設置と鐘楼の撤去とに見られるように、ナシヨナリズムはキリスト教の勢力を圧倒したことがわかる。その後、ウンベルト一世とその王妃の墓の扱いに見られるように、ナシヨナリズムのひとつの代表としての王権は衰えを見せる。そして、ヴィットリオ・エマヌエーレ三世とウンベルト二世の墓が「パンテオン」に不在であることに見られるように、イタリア・ナシヨナリズムのひとつの代表としての王権は滅ぶのである。その一方で、キリスト教の勢力も、「パンテオン」に鐘楼と十字架とを復活できなかったことに見られるように、全体的には弱体化したままであるといえるだろう。キリスト教勢力にも、かつてのように、多神教の建物の内外から、その特徴となる像などを除去して、その代わりに

キリスト教の印で置き換えてゆくだけの力はもはや備わっていないのである。

おわりに

本稿では、ローマ市の中心に作られた通称「ヴィットリアーノ」、すなわち、「ヴィットリオ・エマヌエーレ二世国立記念堂」について、(一) その外部に明示されているもの、(二) 内部に潜められているもの、に注目し、(三) それらの特徴と、ムッソリーニによるこの施設の利用の仕方との関係に注目し、(四) 「パンテオン」の外部・内部に見られる特徴とも比べてみた。

「ヴィットリアーノ」の外部は、明示的に古代ローマの繁栄・栄光・軍事力とそれらの復活を示す建築物や像をあふれさせている。その一方で、キリスト教にかかわる十字架や聖人像などをまったく見せず、むしろ、王の騎馬像を古代の「ローマの女神」が支える意匠を採用している。この施設の外面は、近代国家統一の過程の結果として、イタリア王国政府が、ローマカトリック信者が圧倒的多数を占めている国のなかで、ローマカトリック教会と対決しなければならなかった悲運を明示し、この王権が短命であることを暗示しているといえる。

「ヴィットリアーノ」は、元々はヴィットリオ・エマヌエーレ二世による国家統一事業を称えるための施設だった。しかし、まもなく内部に無名兵士のための地下墓所が作られ、外部にもこの施設が無名戦士のための国立墓所——「祖国のための祭壇」——であることが明示された。「ヴィットリアーノ」に付加された無名戦士の

墓・「祖国のための祭壇」は、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の国家統一事業を称えるためという当初の目的と矛盾するものではない。むしろ、どちらも近代ナシヨナリズムの発現という点で共通するから、墓と祭壇の設置によって、「ヴィットリアーノ」はナシヨナリズムを称揚する施設としての力を倍增させたのだといえる。

興味深いのは、「ヴィットリアーノ」内部の無名戦士の墓は、キリスト教（ローマカトリック）の礼拝所であるのだが、「ヴィットリアーノ」は外面にその事実は見せずに隠していることである。

ムッソリーニは、首相に指名された際に「ヴィットリアーノ」の階段から演説をおこなったり、「ヴィットリアーノ」に近接する「ヴェネツィア宮殿」に執務所を置き、「ヴィットリアーノ」を見晴らすバルコニーから演説をしたりした。そればかりではない。ムッソリーニは、「ヴィットリアーノ」から古代ローマのコロセウムに至る直線道路を建設したり、「ヴィットリアーノ」を起点としてオスティアへ至る道路を建設したりした。道路の終点近くには、古代ローマが地中海の制海権をふるう基地にした港があったのである。

ムッソリーニが「ヴィットリアーノ」に関しておこなった施策は、彼に先立つイタリア政府のおこなった施策と一貫し、それを完成させるものだった。ムッソリーニ以前のイタリア政府も、「ヴィットリアーノ」を造り、その前面に広大な広場を作り出し、この広場に重要な道路を集中させていた。ムッソリーニ政府は、それ以前の政府の施策——「ヴィットリアーノ」を利用してナシヨナリズムを発揚し、それを古代ローマの栄光と結びつけようとする施策——を受け継ぎ、発展させたのである。

「パンテオン」は、元来は古代ローマの多神教のための施設だったが、キリスト教会が勢力を増して古代ロ

ローマの多神教文明を圧倒し始めたところにキリスト教会に転用された。この建物は、多神教を思わせる像を除去し、内部にキリスト教の祭壇を置いたばかりでなく、のちには、正面のポルティコのうえに鐘楼と十字架を設置して、キリスト教会であることを明示するようになった。「パンテオン」は、ある時点まで、キリスト教勢力の力が上昇していった歴史過程を見せていた建物なのである。その点で、「パンテオン」は「ヴィットリアーノ」と対照的である。「ヴィットリアーノ」は、無名戦士の墓のキリスト教（ローマカトリック）祭壇化によってキリスト教の力のさやかな侵入を受けながらも、それを深奥に潜めて外面にまったく見せない。「ヴィットリアーノ」は高揚した強力なイタリアの近代ナショナリズムを眼前に見せる施設なのである。

キリスト教会としての「パンテオン」については、イタリアのナショナリズムが高揚したところに、ナショナリズムの浸食をこうむったことに注目すべきだろう。「パンテオン」はヴィットリオ・エマヌエーレ二世の墓所のある教会だが、この墓所はそれ以前の「聖霊」を祀る礼拝堂から「聖霊」を追放して、王自身を礼拝させた施設である。このとき、ナショナリズムはキリスト教を圧倒したのである。また、この墓所の設置とほぼ時を同じくして、「パンテオン」の屋根から鐘楼と十字架が除去された。この除去はただ単に「パンテオン」を古代の形態に戻したというよりも、むしろ古代ローマの復興と結びついたナショナリズムがキリスト教の力を圧倒した現れである。その後、鐘楼と十字架は屋根のうえに復活していないから、その点にも、ローマカトリック教会がかつての勢力を備えていないことが現れている。

ヴィットリオ・エマヌエーレ二世のあとを継いだウンベルト一世とその王妃の墓所も「パンテオン」に設置されている。この施設も本質的には、父王の墓所と同じく王と王妃を礼拝させるものでありながら、形態と位

置は、伝統的なキリスト教会のなかの墓に近い。その点に、ナショナリズムの中心としての王家の力の衰えを見ることができよう。そしてウンベルト一世の後継の王たちは王制廃止とともに国外に追放されたため、ヴィットリオ・エマヌエーレ三世とウンベルト二世の墓はどちらも外国にあつて、「パンテオン」には存在しない。「ヴィットリアーノ」の外面が暗示していたように、ナショナリズムの中心としてのイタリア王家の力は急速に衰えたのである。

【本稿は、JSPS 科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究 25580073）による研究成果の一部である】

引証文献

- Antelini, Simona (2003) *Il Vittoriano: scultura e decorazione tra classicismo e liberty*. Roma: Artemide Edizioni.
- Atkinson, David & Cosgrove, Denis (1998) "Urban Rhetoric and Embodied Identities: City, Nation, and Empire at the Vittoriano Emanuele II Monument in Rome, 1870-1915." *Annals of the Association of American Geographers*. 88.1, 28-49.
- Bosworth, R.J.B. (2010) *Mussolini*. New edition. London & New York: Bloomsbury Academic.
- Brice, Catherine (1986) "L'immaginario della Terza Roma," in *Il Vittoriano: Materiali per una storia*. Roma: Fratelli Palombi Editori.
- Clark, Martin (2014) *Modern Italy: 1871 to the Present*. 3rd ed. London & New York: Routledge.
- Clark, Martin (2013) *The Italian Risorgimento*. 2nd ed. London & New York: Routledge.
- Hughes, Robert (2012) *Rome*. London: Phoenix.
- Kosof, Spiro (1993) *The Third Rome 1870-1950: Tragic and Glory*. Berkeley: University Art Museum.
- MacDonald, William L. (1976) *The Pantheon: Design, Meaning, and Progeny*. Cambridge Mass. & London: Harvard U. P.

Norwich, John Julius (2011) *Absolute Monarchs: A History of the Papacy*. New York: Random House.